

今回は、2022年10月9日・10日に行われた第27回日本口腔顔面痛学会学術大会について東北大学大学院歯学研究科歯科口腔麻酔学分野、兼、口腔内科・リエゾンセンターの工藤葉子先生に報告していただきます。

第27回日本口腔顔面痛学会学術大会参加報告

東北大学 歯科口腔麻酔学分野、口腔内科・リエゾンセンター 工藤 葉子

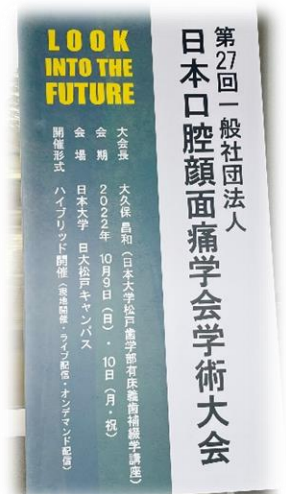
令和4年10月9日(日)、10日(月)の二日間に渡り、日本大学松戸歯学部キャンパスを会場に第27回日本口腔顔面痛学会学術大会が開催された。昨年に引き続き、COVID-19の感染対策として、現地開催、LIVE配信、オンデマンド配信とのハイブリッド開催となった。今回は、現地、オンデマンド配信の体験を報告する。

〈開会式〉

今大会のサブタイトルは”LOOK into the FUTURE”ということで、大会長の日本大学松戸歯学部、大久保昌和先生より、某有名映画のタイトルになぞらえて考えたというエピソードも交えた開会の挨拶で幕を開けた。



大会長 大久保昌和先生
(日本大学松戸歯学部有床義歯補綴学講座)



10月9日(日)大会1日目

基礎シンポジウム：「歯科麻酔科医の痛み研究」

歯科麻酔の臨床と研究を両立されている、前川博治先生(大阪大学大学院 歯学研究科高次脳口腔機能学講座)、矢島愛美先生(鶴見大学歯学部 歯科麻酔学講座)、城戸幹太先生(神奈川歯科大学 麻酔科学講座歯科麻酔学分野)が講演された。

前川先生はドパミン神経による神経障害性疼痛の抑制の可能性、矢島先生は痛覚変調性疼痛の薬物療法の開発に有用な動物モデル、城戸先生は術後疼痛発症メカニズムについてそれぞれ講演された。図表を交えた基礎研究素人にもわかりやすい講演であった。臨床と研究を両立するモチベーションを各先生から聞く場面もあり、両立を目指す若手には良い刺激となった。

リフレッシャーコース1：「口腔顔面痛診療の実際」

講師に和嶋浩一先生(元赤坂デンタルクリニック 口腔顔面痛センター)を迎え、臨床推論のプロセスから治療へ移行するまでの過程、治療まで幅広い内容だった。筋筋膜性歯痛の超音波療法や神経障害性疼痛の薬物療法の具体的な処方についても詳細な解説があった。一番の目的は「患者の喜ぶ顔」であるというお話があった一方で、「正しい診断が得られたからといって患者の喜ぶ顔が得られるとは限らない」という言葉が心に響いた。患者の解釈モデルと専門医の病気ストーリー間のずれを摺り合わせ、共同の解釈モデルを持って治療へ移行することが重要である。慢性疼痛の治療はBiopsychosocialモデルを念頭に心理社会的対応も忘れてはならない。

特別講演：「慢性疼痛の病態とペインクリニック診療」

講師に佐伯茂先生（太田総合病院 麻酔科）を迎えた。先生ご自身の臨床の経験を交えた、臨床に活かすべき重要な教訓がたくさん詰まっていた内容であった。特に医療過誤による慢性疼痛の症例が印象に残った。医療用麻薬処方への注意や術後痛患者の診察は「神経学的所見を取ることを忘れるな」という教訓が印象的であった。口腔外科、歯科麻酔の先生方が日常行っている血管穿刺も一歩間違えると慢性疼痛の原因となる。解剖学的知識を基に慎重に行うべき手技であると再度認識させられた。

教育講演 1：「口腔顔面痛に必要な頭痛の基本」

講師に今井昇先生（静岡赤十字病院脳神経内科）を迎えた。片頭痛、緊張型頭痛、三叉神経・自立神経性頭痛（TACs）のそれぞれについて、実症例を用いながら、メカニズム・診断・治療について解説がされた。TACs の 4 病型を鑑別するにあたり、ポイントとなる発作頻度、持続時間、インドメタシンの効果の違いが分かりやすく、覚えておきたいと思った。また、片頭痛治療の新薬である、CGRP 関連薬の有効性・安全性についても話題になった。頭痛診療の診断、薬物療法はアップデートが目覚ましく、遅れないようにしたい。

ランチョンセミナー 大会 1 日目

「新しいブラキシズムマネジメント戦略」

座長に島田明子先生（長崎大学生命医科学領域歯科系 歯科補綴顎分野）、演者に Peter Svensson 先生（Section for Orofacial Pain and Jaw Function, department of Dentistry and Oral Health, Aarhus University）を迎え、英語での豪華なランチョンセミナーであった。ブラキシズムのメカニズムに始まり、機器を使用したモニタリングの方法、電気刺激法を用いたマネージメントの方法まで画像や図表を交えて解説がされた。



Peter Svensson 先生

海外特別講演：「Classification of BMS-and beyond」

ランチョンセミナーに続き、講師に Peter 先生を迎え、座長の飯田崇先生（日本大学松戸歯学部 クラウンブリッジ補綴学講座）の進行で始まった。時代と共に発展していく口腔顔面痛疾患の分類や学術用語の変遷を文献やオリジナルの図を用いて非常にわかりやすく解説をしてくれた。今回の講演では特に Burning mouth syndrome (BMS) について解説がなされた。2つの病型の違い、検査の内容に始まり、メカニズムの違い（末梢性か中枢性か）による治療反応の違いがあることも述べられた。「syndrome or disorder」という議論が最近勃発しているという話題も非常に興味深かった。BMS についても概念が日々議論されており、アップデートが必要だと痛感した。

リフレッシャーコース 2：「筋筋膜痛」

講師に左合徹平先生（九州歯科大学 歯科侵襲制御学分野）を迎えた。ICOP-1 に基づいて Step ごとに筋筋膜痛の診断プロセスを詳細に解説された。治療については、基本的な理学療法や薬物療法に加え、トリガーポイントブロックやエコーガイド下筋膜リリースの使用薬剤や手技の解説がされた。特にトリガーポイントブロックやエコーガイド下筋膜リリースは実際の手技中の動画があり、わかりやすかった。

リフレッシャーコース 3：「口腔顔面痛に役立つ神経解剖学」

講師に中松耕治先生（飯塚病院 歯科口腔外科）を迎えた。口腔顔面痛にかかわりが深い脳神経系について美しい解剖のイラストを用い、解説された。歯科医師が熟知しておくべき三叉神経は中でも時間を割いて解説があった。各枝における Red Flag を示唆する所見や解剖学的に注意すべき点が勉強になった。第 1 枝領域の帯状疱疹を認めた場合には Hutchinson sign（鼻部の皮疹）を呈していないか必ず確認をしたい。

教育セミナー：「口腔顔面痛の臨床推論」

鋪野紀好先生（千葉大学大学院 医学研究院地域教育学）から、二重過程理論の学修方法と初学者が陥りやすいエラーについて解説された。内田貴之先生（日本大学松戸歯学部 歯科総合診療学講座）からは、歯科の臨床に即した診断推論の解説、板橋基雅先生（いたばしデンタルクリニック）からは、実践編として症例提示があった。会場でのディスカッションも盛り上がった。自分の診断プロセスを振り返り、省察的实践を積み重ねていくことが、個の能力の昇華に重要だと学んだ。自分が起こしやすい診断エラー（見逃し/間違い/遅れ）を自覚して反省したい。リフレッシャーコース 1 と併せて本講演内容を復習したい。

シンポジウム 1：「ボツリヌス毒素の可能性」

演者として、山本由弥子先生（岡山大学学術研究院 医歯薬学域病原細菌学分野）、松香芳三先生（徳島大学大学院医歯薬学研究部 顎機能咬合再建学分野）、野間昇先生（日本大学歯学部 口腔診断学講座）の 3 名の先生方をお迎えした。山本先生からはボツリヌス神経毒素（BoNT）精製方法の研究やメカニズム、野間先生からは三叉神経痛、三叉神経ニューロパチーへの応用、松香先生からは神経障害性疼痛モデルを用いた BoNT の効果メカニズムの研究を各々解説された。BoNT の産生の裏側や応用の展望について知ることができた。最後の相互討論では実際に臨床で使用されている先生方からの話や今後 BoNT を普及させていく上で学会として取り上げるべき問題点などが活発に議論された。

大会 1 日目&2 日目 一般演題ポスター

2 年ぶりにポスターを掲示した開催となった。全部で 26 演題あり、各日ともに 30 分間、ポスターセッションの時間が設けられた。発表者と聴衆が、会場で直接ディスカッションをするという形式だった。両日とも一般演題の会場は白熱した討論が繰り広げられ、大盛況であった。



ポスターセッション中の会場の様子

教育講演 2：「口腔顔面痛に役立つ精神薬理学」

講師に山田和男先生（東北医科薬科大学病院 精神科）を迎えた。身体表現性障害と身体症状症の定義の違いとそれぞれの診断基準のわかりやすい解説から始まった。続く治療法の解説では、口腔顔面痛領域の慢性疼痛治療に使用される抗うつ薬や抗てんかん薬について、用法、用量、注意すべき副作用、処方時に必要な臨床検査が具体的に示された。痛みが主症状である身体症状症（≡痛覚変調性疼痛）では薬物療法に認知行動療法を併用していくことも重要である。認知行動療法のポイントも端的に解説があり、すぐに活かせる知識が詰まった講演であった。

リフレッシャーコース 4：「神経障害性疼痛」

講師に河端和音先生（鶴見大学歯学部 歯科麻酔学講座）を迎えた。三叉神経痛、外傷後神経障害性疼痛を診断から治療まで画像も交えて解説された。侵害受容性、痛覚変調性、神経障害性の 3 つをベクトルに例えた治療法の解説は、わかりやすく、参考になる。治療目標の設定として QOL や ADL の向上を最終目標に据えることが重要であり、これを達成するには画像所見に加え、不眠・不安・抑うつといった状態の評価も大切である。静脈が原因で生じる三叉神経痛の珍しい症例も供覧され、非常に興味深かった。

OFF 開業臨床医のためのコミュニティ（OCPD）：

「開業医における OFF 診療の課題解決に向けて」

池田浩子先生（静岡市立清水病院 口腔外科）と木津真庭先生（鷹栖歯科）が司会進行をしてくださった。飯沼英人先生（風の杜歯科）から会の活動報告に始まった。瀬下博嗣先生（すずき歯科クリニック）は、クリニックで口腔顔面痛診療を行う上での、スタッフ教育やスケジュール調整などの工夫について詳細に紹介をされた。棚原樹夢先生（棚原歯科）は、オンライン診療の実際について準備から実際の診療までを提示してくれた。次に、大歳祐生先生（医療法人社団栄石会 石井歯科医院）、石井 彩先生（山崎歯科クリニック）による認定医試験受験の体験談があった。申請書類の作成や要項で疑問に思う点について、実体験を基に詳細な説明があった。続けて、板橋先生から専門医試験にむけて受験要項を満たすための現状の課題提示がなされ、活発な議論が繰り広げられた。開業医に限らず、すべての先生が聞いて役立つセッションだった。

シンポジウム 2:

「痛覚変調性疼痛 nociceptive pain を理解する」

井川雅子先生（静岡市立清水病院 口腔外科）から口腔灼熱痛症候群，持続性特発性顔面痛，持続性特発性歯痛の解説があり，認知行動療法を併用した抗うつ薬治療の有効性を学んだ。加藤総夫先生（慈恵会医科大学神経科学研究部）からは脳中心主義的痛みの理解から痛覚変調性疼痛の背景を学んだ。北原雅樹先生（横浜市立大学附属市民総合医療センターペインクリニック内科）からは「慢性痛の3つの呪い」という誤った認識の修正に始まり，日常臨床に活かせる痛覚変調性疼痛の画期的な捉え方までを学んだ。相互討論でも用語の概念について白熱した議論が行われた。

シンポジウム 3

「学際的診療でメディカルスタッフはどう動くのか」

青野修一先生（玉川大学工学部ソフトウェアサイエンス学科）からは，データサイエンスで診療を支えている受診患者データの分析結果などの供覧があった。佐藤今子先生（日本大学医学部附属板橋病院看護部）は慢性痛患者の看護師診察に努められ，慢性痛診療に重要な生活調整の主軸を担っておられた。井上雅之先生（愛知医科大学疼痛学講座）は理学療法士であり，慢性口腔顔面痛への局所・全身の運動療法による効果を示された。西須大徳先生（愛知医科大学病院疼痛緩和外科・いたみセンター）からは，チームアプローチで診断治療を行った症例の提示が行われた。多職種の皆さんの支えで慢性痛診療が成り立っていると痛感した。

日本顎関節学会合同企画 教育講演 3:

「顎関節症アップデート」

講師に西山暁先生（東京医科歯科大学 大学院医歯学総合研究科 総合診療歯科学分野）を迎えた。顎関節症の初学者にもわかりやすくという本講演のコンセプト通り，DC/TMD に基づいた顎関節症の検査・診断方法，注意すべき鑑別疾患と各病態に対する治療法を詳細に解説された。日常の臨床で頻繁に行う Tooth Contact Habit の是正に対する行動変容法を行う上での，段階的な指導方法が勉強になった。意識化訓練や競合反応訓練は日々の診療に取り入れていきたい。初学者では難しく感じる変形性顎関節症へのアプローチについても診断，治療の一連の流れが理解できる内容であった。

リフレッシャーコース 5: 「神経ブロック療法」

講師に椎葉俊司先生（九州歯科大学付属病院 ペインクリニック科）を迎えた。神経ブロック療法の概説に始まり，星状神経節ブロックと三叉神経ブロックを適応症例，使用器具，薬剤を含めて重点的に解説された。処置時のポイントや注意点を踏まえながら，実際の処置を行っているときのエコー動画も供覧された。神経ブロック療法の今後の展望として，痛覚変調性疼痛の治療への応用の話があった。メカニズムは解明されていないが，舌痛症を含む口腔灼熱痛症候群に神経ブロックの効果があるという報告が存在する。今後さらなる臨床的な知見や基礎研究での解明が進むことを期待する。



アプリで学ぶ口腔顔面痛

ランチョンセミナー 大会 2 日目

「アプリで学ぶ口腔顔面痛」を活用しよう

座長に佐々木啓一先生（東北大学歯学研究科），演者に臼田 頌先生（慶応義塾大学医学部 歯科・口腔外科学教室）を迎えた。2018 年から本学会で取り組んでいる口腔顔面痛教育の e-learning アプリについて開発の中心を担う臼田先生から具体的な活用法の解説がされた。クイズ形式で学習できる機能や学会のセミナーの申し込みができる機能など便利な機能がたくさん詰まった素晴らしいシステムである。私は今年度の口腔顔面痛学会認定医試験を受験したが，今後受験を控えている先生方には勉強の一助としてぜひ活用をお勧めしたい。



（左）臼田 頌先生 （右）佐々木啓一先生

このアプリは今回の学術大会のオンデマンド配信でも大活躍。まだ配信以外の機能をお試しでない会員の先生は，ぜひお試しを！佐々木先生，臼田先生をはじめ開発にご尽力いただいた皆さんに感謝したい。

医療安全講習会

「歯科医療と患者の人権」

講師に佐久間泰司先生（大阪歯科大学 医療安全管理学/ペインクリニック）を迎えた。本学会が、初めて日本歯科専門医機構の歯科専門医共通研修に認定された、記念すべき講習会である。「医療倫理」はなかなか開催されることが少ない貴重な分野であり、本学会員以外の先生も受講した先生が多かったのではないかと思う。本学会らしく、「痛み」のとらえ方を倫理、哲学と絡めた内容の講習であった。日本語と英語、それぞれの「痛」の語源の解説は非常に興味深かった。遙か昔の時代から、我々人間は「痛み」と向き合ってきたことを学んだ。

日本顎関節学会合同シンポジウム：

米国 NASEM リポートから日本の未来を見通す

顎関節学会との合同企画として 2020 年 3 月に全米アカデミーから発行された Consensus Report について取り上げた。まず、大久保先生から内容の概要と勧告の説明があった。次に小見山道先生（日本大学松戸歯学部 クラウンブリッジ補綴学講座）から、研究とケアのための優先課題に注目した詳細が説明された。顎関節症の指針 2020 をベースに指針の見直しが始まっている。続いて村岡渡先生（川崎市立井田病院 歯科口腔外科）から、勧告のうち口腔顔面痛学会が担う部分の詳細が説明された。ガイドラインの作成や集学的痛みセンターとの連携構築などの事業が紹介された。最後に、築山能大先生（九州大学大学院歯学研究院 総合歯科学講座 歯科医学教育分野）から卒前・卒後の歯科教育における TMDs のコアカリキュラムについて説明された。



左から小見山先生、大久保先生、村岡先生、築山先生

リフレッシャーコース6：「痛みと心理」

講師に土井充先生（広島大学大学院医系科学研究科歯科麻酔学研究室）を迎えた。慢性疼痛患者に特有の破局的思考などに代表される認知行動性への治療介入について、基礎知識や心構えを患者が陥っている思考過程と共に解説された。学生教育レベルでは教わることのない分野であり、若手が臨床で直面する課題の一つが心理介入であると思う。「痛みを軽減するために心理的な支援をする人」として、患者が「痛みを受容」できる End Point を目指していこうと、自分自身の認識を新たにさせられた内容であった。

リフレッシャーコース7：「口腔顔面痛の薬物療法」

講師に福田謙一先生（東京歯科大学 口腔健康科学講座障害者歯科・口腔顔面痛研究室）を迎えた。口腔顔面痛における薬物療法について、疼痛発生機序や病態、臨床経過の違いを踏まえながら解説された。抜歯後疼痛へのケタミンや ATP 製剤の静注の応用など、経口薬以外の薬物療法についても紹介された。使用する頻度の高いプレガバリンやアミトリプチリンの処方例や副作用への注意点も解説があり、役立つ知識が満載であった。

《閉会式》

2 日間に渡り活発な討論が行われた学会は優秀論文賞、ポスター賞の表彰をもって閉会を迎えた。

現地開催、LIVE 配信、オンデマンドと 3 形態の準備があり、膨大な仕事量であったと思うが、大会長の久保先生をはじめ、運営を担っていただいた日本大学松戸歯学部の皆様、学会事務局の皆様から感謝の拍手を送りたい。



ハロウィン仕様で可愛いデコレーションが会場にはたくさん！

《感想》

COVID-19 感染流行により、東北地方からの外出ができずにいた私にとって、2年ぶりに現地参加が叶った学会であった。久しぶりに対面でお会いできた先生もいれば、Web上でしかお会いしたことがなく、初対面が叶った先生もいた。ランチョンセミナーでお弁当を食べている瞬間、「日常が戻ったなあ」としみじみ思った。COVID-19の流行で失われていた当たり前が、こんなに素晴らしいことだと気づかされた。

最近自分で口腔顔面痛の患者を診療する機会が増え、診断・治療で壁に当たることが増えてきた。各リフレッシュャーコースは、口腔顔面痛の診療を始めたばかりの先生にはおすすめしたい。日頃の臨床に活かせる診断や治療のノウハウがたくさん詰まっており、夢中になって聞いていた。また、頭痛やペインクリニック診療、精神薬理学などは各専門の医科の先生による講演であり、普段なかなか聞くことができない話がたくさん聞けて大変面白かった。

今大会も魅力的なプログラムで構成されており、どこの会場のセッションを聞くか選択に苦労した。こんな時にオンデマンド配信で後日聴講ができる仕組みで救われた。オンデマンド配信のおかげで全プログラム制覇という以前では成し得なかったことができるようになった。COVID-19の流行により失ったものもあったが、LIVE配信やオンデマンド配信、口腔顔面痛学会のアプリケーションなど、日本全国どこにいても学びの機会を得られる仕組みも構築されてきた。私のように地方に住んでいると、このような仕組みは非常にありがたい。COVID-19の流行を経て得られた新たな良き伝統を感染終息後も継続をしていただけることを切に希望したい。

【工藤葉子（くどうようこ）先生のプロフィール】

【略歴】

2017年3月 東北大学歯学部卒業
2017年4月～2019年3月 慶應義塾大学 歯科・口腔外科学教室 初期臨床研修医
2019年4月～2019年9月 慶應義塾大学 歯科・口腔外科学教室 助教
2019年10月～ 東北大学大学院歯学研究科 博士課程入学・歯科口腔麻酔学分野入局

【所属学会等】

日本歯科麻酔学会
日本口腔顔面痛学会（認定医）
日本口腔内科学会（認定医）
日本口腔外科学会
日本顎関節学会
日本障害者歯科学会
日本いたみ財団（いたみマネージャー、いたみ専門医）



日本口腔顔面痛学会 News Letter へのお問い合わせは

「日本口腔顔面痛学会事務局」まで

〒135-0033 東京都江東区深川 2-4-11 一ツ橋印刷株式会社学会事務センター内

TEL: 03-5620-1953, FAX: 03-5620-1960 E-mail: jsop-service@onebridge.co.jp